

片山洋子作 「裂かれた紙袋」

< 前編 >

- (効果音) (始業ベル)
- (効果音) (教室のガヤ)
- 柳田健二 うわぁ、ヤベー、遅刻しちゃう！
- 男子B ぎょ！ おい、健二。門のところにいるの、あれ、^{おいぬま}生沼じゃねえか？
- 健二 どれ？ あ、生沼だ。あいつかよー。マイッたな。
- 男子B よりによって生活指導の、それも軍隊上がりを鼻にかけてるやつとはなァ。こりゃ、生徒手帳、取られるかもなァ。
- 健二 (小声で)バカ！ デカい声で言うな。もう目の前だぞ。
- 生沼先生 こらー、お前たち。何時だと思ってるんだ。たるんでるぞ、全く。
- 健二/男子B はーい、すみません。
- 佐々木真裕美ナレーション 朝からどなりつけられた男の子たち。ったくドジなんだ。でもそのうちの一人は、わたしの彼、柳田健二君。わたしと同じバスケット部なの。ちょっと抜けてるんだけど、でも筋が一本通ってて、なかなか頼もしいんだ。(クスリと笑い)
- あ、そうそう。こういうわたしは、青春中学3年、佐々木真裕美。よろしく！
- (音楽) (軽快なブリッジ)
- (効果音) (教室のガヤ)
- 男子B おーい、来たぞ。生沼、早く座れよ。
- 森郁恵 あー、イヤな授業だなァ、もう。社会科って、生沼のは自分の話ばっかなんだもん。ねえ真裕美。
- 真裕美 ほんとほんと。今日もまた「戦争の傷跡がどうちゃらこうちゃら」って話なんじゃない？ あ、来た。
- 男子 起立。礼。着席。
- 生沼先生 あー、まずう、昨日の宿題をやってもらうかな。
- 健二 (小声で)あ、いっけねえ。おれ、忘れちゃったよ、宿題。おい、真裕美、真裕美、見せてくれよ。
- 生沼先生 (かぶせるように)だれだ、そこ！ あん、柳田か。おいお前、宿題やってきてあるのか？
- 柳田 あ、いえ。あの、その... 忘れました。
- 生沼 何？ 「忘れました」？ ほう、宿題もやっとなやつが、女とペチャペチャしおって、けしからん。根性直してやるか。おい柳田、走ってこい。校庭 10 周だ！
- (効果音) (クラスメート、ガヤ)

健二 えー、10周？ 昼飯前なのに、そんな…。

生沼 つべこべ言わんと、早く行かんか！ ほかに宿題忘れたやつはどうだ？(F0)

ナレーション もう、ひどーい。生沼先生ったら。みんなの学校にもいるでしょ、こういううるさい先生って。そんなのが、えてして生活指導の担任なんだよね。だから大変なの。聞いて！

(音楽) (ブリッジ)

男子 あ、生沼だ。ヤバい。ガ克蘭のホック、取れたまなんだ。

生沼 なんだぁ、そのホックに、この目障りな髪の毛は？

男子 (髪をつかまれて)い、いてえ！

生沼 男子は耳がかぶらないようにするのが規則だぞ。女子は肩まで。おいお前、切るのか結ぶのかはっきりしろ。

女子 でも…。

生沼 何が「でも」だ。よし、職員室へ来い。おれが切ってやる。

(音楽) (ブリッジ終わる)

ナレーション …とまあ、いつもこんな調子。ほかに、やれスカートが何センチ長いとか短いとか、ズボンのすそがどうとあって、そんなことばっか。何が面白いんだろ。イヤなやつ。それにしても健二君、大丈夫かなぁ。

(効果音) (テレビのニュース音声)

松本真喜 ふーん、真裕美ちゃんの学校にも、そういう先生がいるの？ でも、お昼ご飯前に、校庭10週はつらかったでしょうね、健二君。

真裕美 そうなのよ、真喜姉さん。終わったあとなんか、もうフラフラでさ。いくら普段バスケで走ってるって言ってもねえ。もうかわいそうだった。

真喜 うーん。かたちを変えた体罰って言ってもいいわね、それ。

真裕美 体罰？

真喜 そう、体罰。しばらく前から世間でも問題になってるけど、規則を破ったり、言うこと聞かない子に、言葉じゃなく体で罰を加えるのよ。“教育指導”のやりすぎなんて言われるけどね。

真裕美 ふーん。じゃ真喜姉さんはどうしてるの？ 幼稚園で子供たちが言うこと聞かなかったり、悪いことしたときってどうするの？

真喜 そうねえ。まず、どうしてそんなことをしたのか、よく背景をつかむようにするわね。それから対処をするかな。

真裕美 うぁ、冷静。

真喜 ううん、そうしようと心がけてるの。たまには感情的になることもあるけど、でも、そういう時って、後味悪いのよね。幼稚園の子供と中学生では、違うでしょ。小さい時は、良いこと・悪いことをまだ知らないから、体で覚えさせるってこともあるけどね。中学生には中学生のしかり方ってあるんじゃないかなぁ。もうほとんど

ど大人なんだもん。

ナレーション ウンウン、そうだそうだ。真喜姉さんの話だと、とても素直に聞けるんだ。不思議な人なの、松本真喜さん。ほんとはわたしのおばさんなんだけど、クリスチャンで、教会の幼稚園の先生なんだ。本人は「怖い先生なのよ」って言うけど、子供たちのこと本気で考えてるから、そうなるんだって。“怖い”って言っても、きっと生沼先生なんかとは違う怖さなんだろうな。ほら、あるじゃん。同じ怒られても「コンチクショウ」って思うのと、「すみません」って素直に言えるのと。

ナレーション 次の日、わたしは家庭科の調理実習のための野菜を持って登校した。すると

生沼先生 3年A組の女子、みんな前へ出る。

(効果音) (ざわめき)

ナレーション なぜか、朝のホームルームの時間から、生沼先生がクラスに来ていた。その怒りを含んだ顔からは、またぞろなにか起こりそうな予感がした。

生沼先生 どうしてお前たちは紙袋を持ってきた、あん？

女子A だって、今日は調理実習で野菜とか肉とかたくさん大きなものが入るから…。

女子B そうです。だから大き目の紙袋に入れて持ってきたんです。

生沼先生 袋なら、規則で決まっている袋があるだろ。なぜそれに分けてこない、あん？規則だぞ。

真裕美 先生、でもあの、今年から紙袋を使ってもいいことに…。

生沼先生 (かぶせて)いいか、中学生には、中学生らしい持ち物ってものがあるだろう。マジックバッグだ。制服にはマジックバッグ。これが我が校の規則だ。分かったか？ 分かったやつは席に着け。

(効果音) (イスのガタガタ言う音)

生沼先生 おい、お前たち。何も言わずに座るのか？ 間違っことをしたら、謝るのが礼儀だろ？

女子たち (口々に)はい。すみませんでした。

ナレーション 女の子たちは口々に言うと、一人また一人と席に戻っていった。そして… 郁恵とわたしだけが残った。生沼先生の表情が一段と険しくなった。

生沼先生 ほう、お前たち、おれに文句でもあるのか？ まだ分からんらしいな。良いこと・悪いことの判断を教えるのが教師のおれの役目だからな。

郁恵 どうして紙袋がいけないんですか？ 生徒手帳の規則にも、“いけない”とは書いてないのに。

生沼先生 書いてなくとも、中学生らしくないものはいかんのだ。

郁恵 学校の外では、だれだって使います。

生沼先生 いかんと言ったらいかん！ なんだ、佐々木。お前はしゃべらんのか、あん？押しにでもなったか？

真裕美 いいえ、わたしは…。

(効果音) (生沼先生が真裕美に平手打ちをする「パシッ」という音)

(効果音) (生徒の小さな叫び「アーッ」)

生沼先生 なんだ、その目は！ もういい。分かるまで廊下に立ってろ。

ナレーション クラスのみんながア然としていた。わたしの左ほほ、次に郁恵の右ほほへと生沼先生の平手打ちが飛んだのだ。

真裕美モノローグ 痛くない。ちっとも痛くなんかない！ 涙も出ないんだもん。そだよ。わたし、絶対に間違っていないもん。だれが謝るもんか。先生のほうが悪いのに。わたしは間違っていないんだから！

ナレーション それから、1時間目も終わって、見かねた担任の鈴木先生が中に入って、わたしたちは不本意ながら、生沼先生に頭を下げた。実に不愉快だった。さっき思ってた気持ちは今も変わっていない。「わたしは正しい」と。でも1時間廊下に立っていて、肉体的に疲れてしまっていたので、鈴木先生の「一応謝りなさい」という妥協案を、しぶしぶ認めたのだった。悔しかった。「それ見ろ」とでも言いたげな生沼先生の視線は耐えがたかった。わたしは、この情けない気持ちをだれかに聞いてほしかった。慰めてほしかった。

(効果音) (電話のベル)

真喜 えー、真裕美ちゃんが引っぱたかれたの？ あらまあ。

真裕美 ほんとだよ。親にもまだたたかれたことのないわたしなのにさ。そりゃ、悪いことしてやられるんなら仕方ないけど、もう使ってもいいことになってたんだよ、ほんとに。それなのに…。

真喜 ふーん。おかしいわね。じゃ、こうしたら？ 担任の先生に相談して、その生沼って先生にもよく話してもらったら？ ね？

ナレーション 真喜姉さんのアドバイスどおり、わたしは次の日、担任の鈴木先生に相談した。学校の規則と、生沼先生の指導の矛盾の説明を加えながら。

真裕美 じゃ、鈴木先生、よろしくお願ひします。

鈴木先生 分かったわ。任しておきなさい。

真裕美 あー、すっきりした。先生に話せてよかった。じゃ、失礼します。

ナレーション しかし、その日の夕方、家に帰ってみると、父も母も怖い顔をしてわたしを迎えた。生沼先生から電話があったらしい。

生沼先生 (エコー)お宅のお子さんは、今年に入ってから、少し反抗的な態度が目立ちますな。今年は受験の年だし、内申にも響きますから、ま、お宅のほうでもよく話し合って…。(F0)

真裕美モノローグ なんだって?! 反抗的な態度が目立つ? 冗談じゃないわ。クラス委員もやってるわたしが、そんなことするはずないじゃない。全くもう、鈴木先生はなんで生沼先生に話したの? 「分かった。任せなさい」と言ったのに。どうなってる

のよ。鈴木先生、教えてよ、教えてよ！（多重エコー）

<後編>

(効果音)

(電話のベル)

生沼先生

(エコー)お宅のお子さんは、今年に入ってから、少し反抗的な態度が目立ちますな。今年は受験の年だし、内申にも響きますから、ま、お宅のほうでもよく話し合って...。(F0)

ナレーション

わたし、佐々木真裕美。青春中学3年生。この電話、「内申書にも響くから」なんてまるで脅迫。だれからだと思えますか？学校の生活指導の生沼先生なんです。事の起こりは紙袋の一件。学校で認めたはずの紙袋の使用を、生沼先生が禁止したことに、わたしや郁恵が反発したことから、こんな風に問題が大きくなって、今、わたしは落ち込んでいる。だって、間に入ってくれた担任の鈴木先生は一体、生沼先生にどんな風にわたしの考えを伝えてくれたんだか、分からなくて。解決すると思っていた問題が、もっとゴチャゴチャになっちゃって、わたしはどうしたらいいんだろ。なんだか、鈴木先生も信じられなくなってきちゃった。次の日、学校で

真裕美

あ、先生、鈴木先生。

鈴木先生

あ、佐々木さん。あ、あのね...

真裕美

先生、教えてください。先生は生沼先生になんて話して下さったんですか？

鈴木先生

あ、あのね、佐々木さん。わたし...

生沼先生

おお、佐々木か。鈴木先生もな、お前の生活態度のことを心配してな。内申が悪くなると、担任の責任になるしな。

真裕美モノローグ

担任の責任？ そうか、そういうことか。それで鈴木先生、黙っちゃったんだ。

真裕美

あの、紙袋のことですけど、あれは使ってもいいことに。

生沼先生

(かぶせて)おれの決まりは決まりだ。破ることは許さん。じゃな。

真裕美モノローグ

ンもう！自分のことしか考えないんだから。

鈴木先生

あの、佐々木さん。

真裕美

.....

鈴木先生

分かって。わたしにもプライドがあるのよ。大勢の先生たちの中で自分の立場を守るためには...

真裕美

失礼します。

鈴木先生

あ、佐々木さん！

真裕美モノローグ

ずるい、ずるい。先生たちってずるい。自分のことしか考えない。自分の体裁ばかり気にして、生徒の気持ちなんて、これっぽちも考えてないんだ。そんなの先生じゃない。学校勤めのサラリーマンじゃない！

郁恵

真裕美　！

真裕美 あ、郁恵。あれ、どうしたの、その顔？ 青くなっちゃって！ ああ、昨日のせい？

郁恵 うん。ほら、真裕美を引っぱたいたのは手のひらだったけど、わたしのほうへ飛んできた時は、手の甲だったんだよ。それで骨がバシッと来たもんだから、こんなになっちゃった。もうわたし、恥ずかしくて、本当は今日学校へ来たくなかったんだけど、でも逃げたら、生沼から逃げたらもっと悔しいし、この顔、あいつに見せて、「教育委員会に告げ口するぞ」と脅かそうと思って。

真裕美 わっ、すごいこと考えるね、郁恵。

ナレーション 郁恵の、その青くはれた痛々しい右ほほは、わたしたちのどうしようもない悔しさを表しているように見えた。しかし、生沼先生の反応は、わたしたちの期待を見事に打ち砕いた。

生沼先生 (大笑い) 森郁恵、なんだその顔は。電柱にでもぶつけたか？ それだけはれるとは、まあずいぶん派手にぶつけたもんだな。痛かったろう、あん？ ま、たまにはいいだろう。そのくらいになりゃ、今度からは気をつけようって思うからな。

郁恵 えー？ これは先生が…。

生沼先生 (かぶる) 医務室へ行って、湿布薬でももらってこいや。じゃ、大事にな。(立ち去る)

郁恵 あ、先生。ンもう！ 救^{ゆる}せない！

ナレーション 自分の非を少しも認めず、取り合おうともしない生沼先生の態度に、わたしは腹が立ってしょうがなかった。

真裕美モノローグ 何が「今度からは気をつけるだろう」だ！ 人の顔に傷つけて。顔だけじゃない、心もだよ。何も悪いことしてないのに。そんな体罰ってあるかよ。まるで教師のいじめじゃない！

(音楽) (ブリッジ)

ナレーション その夜、郁恵から電話があった。生沼先生の電話番号を教えてほしいという話だったが、なんの用だったんだろう。郁恵の親から文句を言ってもらうつもりだったのかな。

それから数日たった、ある日のこと。

(効果音) (始業のチャイム)

男子 (オフから) おーい、おいおい、社会の授業、自習だってよ。

女子 えー、どうして？

男子 生沼がさ、なんか門の辺りで倒れたとかってさ。

女子 ほんと？ めっずらしい。あの生沼先生がぁ？

男子 足元がフラフラだったって。見てたやつが言ってたんだよな。

女子 足元フラフラ？ ヤだ、酔ってるんじゃない？

真裕美 でも、今までそんなことなかったのにな。

郁恵 ふん。年なのよ、もう。

(効果音) (クラスのガヤ)

ナレーション やけに落ち着いた風な郁恵の言葉に、ふと不安を感じたのはなぜだろう。

鈴木先生 佐々木さん、佐々木真裕美さん、いる？ ちょっと来て。

ナレーション 呼びに来たのは、担任の鈴木先生だった。

真裕美 なんですか？

鈴木先生 実はね、つかぬこと聞くけど、佐々木さん、生沼先生のところへ電話したことある？

真裕美 えー、生沼先生ですか？ ありませんよ、そんなの。

鈴木先生 あ、そう。そうなの。違うのね。

真裕美 え？ 「違う」って何がですか？

鈴木先生 うん、なんでもないの。ただ、生沼先生、このごろ寝不足みたいで、ゲッソリしちゃって、元気がなかったでしょ？ そして今日はとうとう倒れられたから、ちょっと心配になってね。

真裕美 それと電話とどういう関係が？

鈴木先生 佐々木さんじゃないって分かったから言うわね。どうもいたずら電話があったみたいなの。それも夜中に毎晩。

真裕美 え、いたずら電話?!

鈴木先生 ええ。出ると黙って切っちゃうし、出ないと、出るまで何分でも鳴ってるんだって。奥さんも、隣に寝ているお子さんまで、もうノイローゼみたいになっちゃって。

真裕美モノローグ そんな…。でもだれが？ あ、もしかして郁恵?! まさか。でも電話番号を教えなくて言ってたし。えー、だけど、どうして？

鈴木先生 でも、不思議なのよ。生沼先生、ああいう性格だから、いつもなら警察頼むなり、逆探知するなりで、すぐ相手を見つけ出して、大変な騒ぎになるところなんだけど、今度は何もなさらないのね。「どうしてですか?」って聞いたら、「犯人は薄々分かってるけど、わたしにも落ち度があるから」って。

真裕美 えー、あの生沼先生がそう言ったんですか？

鈴木先生 そう。先生も人間なのよ。だから佐々木さん、このこと、だれにも言わないでね。

真裕美 はい。

ナレーション 複雑な気持ちだった。思いたくないけど、幾重に違いないとも思ってるわたしだった。学校の帰り道、思い足取りでわたしは真喜姉さんの家を訪問した。困った時のよりどころなのだ。心にあること、全部お姉さんに話してみた。

真喜 ...そうだったの。でも、その生沼先生、きつとつらい思いをしてるでしょうね。生徒に自分の気持ちが伝わらないっていうのは、寂しいものよ、教師にとって。

まあ、その先生の方法はあまり賛成できないけど、体罰っていうのが、生徒とぶつかり合うときってね、ケンカするみたいなのところがあるんだけど、しちゃったあとに違いがあるのよね。ひとつは、相手との関係が一步壁がなくなって、近くなるっていうかな。もうひとつは、そのケンカによって、関係が破壊されちゃうことがあるのよね。

真裕美 “関係の破壊”かぁ。生沼先生なんか、本当にそうだよ。怒られても「コノヤロー」としか思わないもん。

真喜 それは結局、怒られたあとの違いというより、怒る教師の心の動機の違いなのよね。本当に親身になって、相手の生徒のことを考えてるのか。それとも、自分の思うとおりにならないから、力で押さえつけようとしてるだけなのか。だからしかるにも注意が必要だと思うわ。つつい生身のまま出ていっちゃうと、関係をズタズタにしてしまう怖さってあるのよ。感情をモロに爆発させるのは簡単だけど、一度失った関係を取り戻すのって、そうれはもう大変。

真裕美 そうかぁ。そうだよ。真喜姉さんは、うちの学校の先生と違うんだよね。やっぱりクリスチャンだからかな。

真喜 そんなことないわよ。ねえ、真裕美ちゃん。教師だって人間だもの、自分の気持ちとうまく表現できる人もいれば、そうじゃない人もいるわ。何か生徒に問題が起こったとき、それを大きく包んで受け止められる人もいれば、ビックリして、突き放してしまう人もいる。教師だって悩ん^んデル^ルタール^ル人^人なんだから。現に、その生沼先生だって、あんたたちを必要以上に罰したあと、自分なりに苦しんで、郁恵さんからの復讐^{ふくしゅう}を受け止めようとしたんでしょ？

真裕美 そっかぁ…。

真喜 結局、余裕がないのね、先生にも生徒にも。思っていることを、お互いにじっくり話し合っ^て、理解した上で教え、教えられていくっていう心のゆとりが。だから教師は、思うようにならないと、手っ取り早く手を振り上げちゃうのよね。わたしだって似たり寄ったりよ。イヤな子には「勝手にしなさい！」なんて思っちゃうもん。

真裕美 えー、真喜姉さんが?! そんなことないよ。こんなに優しいのに。

真喜 優しいだけが相手のためになるとも限らないのよ。時には厳しい、痛い言葉も必要なの。本当に相手のことを思っているならね。聖書にね、こんな言葉があるの。「あなた方の言葉が、いつも親切で、塩味の効いたものであるようにしなさい。そうすれば、一人一人に対するこたえ方が分かります。」(コロサイ 4:6) 毎朝これを心の中で唱えてから出かけるのよ。

真裕美 “親切で、塩味の効いた言葉”かぁ。

真喜 そう。だから、その辺のところ、郁恵さんともじっくり話してみたらどうかな。彼女のためにもそのほうがいいと思うわ。このままじゃ、憎しみが憎しみを生ん

で、一度しかない中学時代が、暗い、惨めな傷跡を残したまま終わっちゃうもの。祈ってるわよ、真裕美さん。

ナレーター わたしは、真喜姉さんに励まされて、郁恵に電話した。

真裕美 もしもし、あ、郁恵？ 今日これから行っていい？ ン、あのね、電話のこと…。
(F0)

ナレーション (F1) 郁恵の家へ向かう道すがら、ふと気づいたら、なぜか知らないけど、生沼先生への憎しみが薄らいで、“郁恵に、なんとか先生の立場も分かってもらおう。一緒に仲直りに行くよう説得しよう”と考えている自分が、我ながら不思議だった。

<完>